

## 短 報

# 介護の専門性から考える その人らしい生活の支援

## —ショートステイで感じた 個別ケアの重要性—

旭川敬老園\*

藤原 裕貴・林 益枝  
森 繁樹

キーワード 介護職員の専門性 高齢者との関わり  
在宅生活の継続 家族の介護負担軽減

## 1. はじめに

私は、専門学校を卒業後、当園で6年間勤務している。この間、4年間は主に重度の寝たきりの者への支援を行い、2年前より要介護度の低い者も多いショートステイ専用のフロアで勤務している。ここでは、当園のショートステイを利用されている要介護区分が同じである2名を事例に上げ、介護職員として自分自身の経験から学んだことについて報告・考察する。

ショートステイとは、できる限り在宅での生活が継続できるよう家族の精神的、身体的な負担の軽減などを図るため、利用者が短期間入所して日常生活全般の介護を受けるサービスのことである。当園では10床のショートステイユニットがあり、様々なニーズをもった者が利用されている。

年々、社会の高齢化が進み、在宅介護をしている世帯が増加している。そのため様々なニーズをもった人々が今後も増え、個々に応じたケアが問われてくる時代になっていく。これからの人生をその人がどう生きていきたいのか考え、今の生活を一日でも長く続けていけるような支援が必要になってくるのではないだろうか。また、その暮らしを支えるには

身近にいる家族の存在も大切である。しかし、家族にとって在宅介護は大きな負担であり、本人が自宅で暮らしたいと思っても、その思いを家族が支えられない場合、在宅生活は困難となる。家族や本人をサポートしていく在宅介護サービスの一つとして、ショートステイがある。

## 2. 旭川敬老園での個別ケアについて

実際の当園でのショートステイ利用者の様々なニーズに沿った個別ケアについて事例を挙げて報告する。

## 1) 事例1 帰宅願望が強く職員に対し手をあげられる方への個別ケア

A様 85歳 男性 要介護区分3

ADL：自分でできるが見守りが必要

生活歴：中学校の先生を定年まで勤める。社会科を教え、生活指導係をしていた。

現病名：アルツハイマー型認知症、腎臓病、血管炎、高血圧

利用しているサービス：

認知症対応型通所介護(週6)

ショートステイ(1泊2日、月2回)

ショートステイ利用の理由：

妻が一人で介護をしている。妻の介護負担軽減のため。

## (1) 当初のショートステイでの状態

帰宅願望が強く、出口を探し、ユニット内を歩き回りドアの鍵を開け、出口がなければ窓を飛び越え、外へ出て行き、自宅に帰ろうと長距離歩かれることもあった。職員が否定的な声かけを行うと興奮され、大声をあげ、手をあげられることもあった。

## (2) ショートステイでの支援方法の検討

- a) 利用中本人が落ち着く環境作り
- b) 集中して取り組めるものはないか検討
- c) 薬の副作用で歩行時ふらつきがみられ、転倒のリスクがある
- d) 帰宅願望時、落ち着かない際の声かけ方法や対応について検討。また介助に入る領域や程度を

社会福祉法人旭川荘(理事長 末光 茂博士)

\*特別養護老人ホーム

見極める。

### (3) 対応方法

- a) 玄関や窓から人影が見えると帰れると思いきや落ち着かなくなってしまうため、玄関側に背を向け職員と関わりやすい席に座ってもらう。又一人言を言われることが多いため周りの者への配慮を必要とする。
- b) 当初よりパズルは集中して取り組める。パズルがしやすいよう周りの環境を整える。又タイミングを考えて誘導し、集中するまで付き添い、声かけ方法に十分注意する。
- c) ふらつきがみられる際には様子をみながら、椅子やソファへ案内してみる。
- d) 職員同士で関わりについてよかった点、悪かった点を話し合い、情報を共有する。帰宅願望で落ち着かない時は一緒に歩き、付き添う。自分でできることは自分でしたいと思っている。気分のムラもあるため、表情や様子をみながら、介助に入るタイミングを判断し対応する。

### (4) 対応検討後の状況変化

- a) 同じ席に座っているためその席が定位置になり、案内するとスムーズに椅子に座り、慣れた席で穏やかに過ごしている時間が増えた。
- b) 何種類かのパズルを用意し、飽きないように工夫した。集中して行っている時間が増えた。
- c) 歩行時付き添い、一緒に歩くことで転倒なく過ごされている。
- d) 否定的な声かけではなく、一緒に出口を探すような声かけを工夫すると大声や手をあげることがなくなった。声かけに対してイライラされることもなくなり、窓を飛び越え、外へ行くこともなくなった。職員同士で情報を共有することで支援方法が統一でき、本人が落ち着いて過ごす時間が増えた。介入方法、タイミングを見極めながら判断し対応できている。

### (5) 在宅介護生活の継続に向けて

ショートステイ利用当初より落ち着かず、帰宅願望が強く外へ出て行くことや職員に対し大声や手をあげられることもあり、当初、職員はどう対応して

よいのか不安もあったのだが、徐々に利用回数を重ねる度に職員が本人に慣れ、表情や動き、その時々タイミングにあった声かけ方法や関わり方がわかっていた。職員同士でも関わりについて、よかった点や悪かった点を色々な視点から情報共有したことで、支援方法が統一できるようになり、本人にも良い関わりができ、職員も認知症を持つ人への関わり方法について学ぶ機会になった。

現在、気分にはムラはあるものの、大声や手をあげることもなく表情も穏やかで、笑顔で職員のことを褒め、頭を撫でてくれることもある。時折落ち着かず大声をあげることがあるが、表情や動きから思いを読み取り、タイミングに合ったその時々声かけや対応ができるようになった。こうしたことの結果、当初と比べ落ち着いて過ごせる時間が長くなった。

妻に対しても大声や手をあげられることがあるため、出来るだけ自宅でみてあげたいと思っていたが、限界を感じていた。今後も妻が短時間でもゆっくり過ごせる時間を持てるとともに、本人が穏やかに過ごせるよう、ケアマネージャーを中心に関係職員が情報共有を行ない、夫婦での在宅生活が少しでも継続出来る様に支援していきたい。

## 2) 事例2 周りに気を遣われる方への個別ケア

B様 93歳 女性 要介護区分3

ADL：自立

生活歴：果物農家で8人兄弟の長女。現在は一人暮らし、隣家に住んでいる長女が食事や日常生活の援助を行っている。自宅に閉じこもりがちである。

現病名：閉塞性動脈硬化症、変形性脊椎症、骨粗鬆症、両膝変形性関節症、くも膜下出血、糖尿病（認知症はなし）等

性格：話好き。いつも笑顔で穏やか、周りの方や職員に気を使い、遠慮をすることが多い。自身で健康管理をしている。

利用しているサービス：

ショートステイ（毎週木～土曜日、又は木～月曜日の定期利用）

2週間に1回主治医往診

現在デイサービスは利用していない

ショートステイ利用の理由：

家族が留守の時が心配。将来のこと(一時外泊や入居)を考え、ショートステイで慣れてほしい。近所の方が当園のショートステイを利用している。そのため利用日が一緒になれば、知った人と会って、話ができるのではないかと。家族の介護負担軽減のため利用したい。

(1) ショートステイでの配慮した点、対応

- a) 周りの方を気に掛け、遠慮されることも多い。
- b) ご本人の思いを汲み取り理解し、話をして思いを聞ける環境づくり。
- c) 羞恥心を大切にす。
- d) 体調を気にかける。
- e) 介助に入る範囲をしっかりと見極める。

(2) 支援方法の検討

- a) 職員が本人のことをしっかりと知り、思いや訴えを先に気づき、本人に声をかける、気にかける必要がある。
- b) 話好きであるため一対一の会話も大切だが他の利用者と一緒に多数で話をする環境づくりも大切。
- c) プライバシーをしっかりと守る。
- d) 職員が病気について理解し、配慮する。
- e) どこまで介助に入るか職員が見極めてから対応する。プライバシーに配慮することが良好な支援関係にもつながってくる。

(3) ショートステイでの現在の状況

初めはショートステイを利用することにとっても不安があり、周りの人や職員に対し、気を使い遠慮されることが多かった。またショートステイを利用することで、周りの人の行動を見て、自分も今後こうなるのではないかと不安が募った。しかし、当園を利用する近所の顔なじみと会え、話ができて、また職員と一緒に買いものや行事、散歩などに出かけるなどの時間が増えたことで、家とは違うショートステイでの楽しみを見つけた。利用回数が増え、本人から思いを伝えてもらえるようになった。また職員も

思いを汲み取り、声をかけやすくなった。本人も家族もできる限り、今の状態での在宅生活を続けていきたいと考えている。

### 3. 考察

要介護区分は同じではあるが支援方法が違うA様、B様ではあった。だが、本人としっかり関わり、一緒に過ごす時間を共有することで、表情や言動などを見極め、一人ひとり違うその時々々のタイミングにあった関わりを行うことができた。また、本人の羞恥心や遠慮を大切にできるようになったからこそ、ショートステイでの生活に慣れ、落ち着いて安心した生活が送れるようになったように思える。家族も職員から利用中の様子を聞き、本人の表情や様子を見ることで家族も安心するとともに、数日間ではあるが、家族が介護から離れることで、負担が軽減された。結果的に、本人や家族が共に少しでも納得することのできる在宅介護生活が継続できていると思われる。

### 4. まとめ

自分自身の経験として、4年間は重度の寝たきりの者との関わりが多かった。そうした利用者に対しては重い要介護状態であっても快適に過ごせるようにと配慮した、主に身体面での個別ケアを行うことが大切であった。しかし、今回ショートステイに異動になり、軽度の方や認知症でない者と関わるようになり、自分のコミュニケーション技術の未熟さを感じた。また、意志のしっかりした利用者に対しては必要な介助に入る範囲をしっかりと見極めることができず、できることまで手を出してしまっていたことにも気がついた。仕事が早い職員や余裕のない職員には利用者も話をかけにくく、対応によっては混乱をまねいてしまうことにも気がついた。これまでは気づかないといけない点にも気づけず対応し、何が悪かったのか振り返ることもできていなかった。

A様と関わり、介護職員がA様を「帰宅願望が強く窓を飛び越えて外に行く手がかかる人、大きな声を出し、職員に手をあげる人」ととらえるか、「どのタイミングで帰りたいと思ってしまい、落ち着かなくなってしまったのか」「手をあげる時や大声を

出す時の職員の関わりはどうだったのか、安心できることはないか」と、本人をどう理解し、支援していくかで本人の落ち着きや穏やかさは変化し、今の生活を続けられる支援に繋がっていくことにも気が付いた。

またB様と関わり、介護職員がB様を「いつも笑顔で自分のことは自分です、手のかからない人」ととらえるのか「手のかからない人だからこそ、しっかり関わり会話をする事で本人を知っていこうと思ひ、関わるのか」と、介護職員の考え方で支援内容も変わる。また自宅とは違うショートステイでの楽しみがあるからこそ、継続して当園のショートステイを利用してもらっている。

声かけや関わりする方法一つで高齢者の笑顔が見え、「ありがとう」と言ってもらえることの嬉しさに職員が気づくとともに、ていねいに対応することでその人の生きがいを見つけ一人ひとりに寄り添えることの大切さを理解できた。そのためには、利用者の安全性ばかり考え対応するのではなく、本人がしたいこと、自分で自分のことをできる範囲で行い、身体を動かすことで穏やかに過ごせる方が、本人にとって良いことであり、今後の在宅生活の継続に繋がっていることにも気づくことができた。

利用者の一日の生活の流れの中に福祉サービスがあり、その人らしい生活を少しでも長く過ごして頂くには、介護職員がしっかり一人ひとりと向き合い、どういう生活を過ごしていただきたいのか考えることが大切になってくる。また、本人や家族が納得できる生活を継続するにはどうしたらよいか、また様々なニーズにあった支援内容を考えていくには、介護職員の知識、経験が必要となってくる。

高齢化が進み、様々なニーズをもった利用者が今後増えてくる。今後は、さらに多様な個別ケアの質が問われてくる時代になっていくと思われる。そして、適切な個別ケアを行うためには3大介護を中心に考えるのではなく、生活歴や家族、周りの環境などさまざまな面からアセスメントしていく必要がある。そのためには利用者の持つ残存機能を生かし、本人自身のADLやQOLを低下させない支援をどう行っていくかを考えていかななくてはならない。本人が望んでいる生活や要望にそった支援方法を考えて

いくためには、介護職員の専門性でもある個別支援の重要性やコミュニケーション技術、利用者理解のあり方が大切であり、経験と柔軟性、心の余裕が必要である。

介護職員の専門性を高めるためには「自分が考える介護とはなにか」、「目指す職員像」などをしっかりと自分自身と向き合って考えることも大切ではないだろうか。また要介護4や5から、比較的軽度の方など幅広く関わるができる環境も介護職員の成長のためには大切ではないだろうか。今後、介護の社会的評価を高めていくためにも、介護職員の専門性のさらなる向上が課題となってくるだろう。

## 5. 参考文献

森繁樹 介護福祉 平成26年秋季号(NO. 95)

「生活支援」としての介護と「個別ケア」公益財団法人社会福祉振興 平成26年9月25日発行